



印刷の原点を視覚で捉える

廣村正彰

デジタル化が進み、印刷の現場でもリアルな「手」の感覚が薄れていくなか、印刷をもっと感覚的に捉えようと、4色分解の原稿を4人の個性で再現してみました。僕とスタッフ、さらにプリンティングディレクターも加わって、それぞれの感性が重なっていく偶然の表現を楽しみながらつくった作品です。

ABOUT TRIAL

トライアルについて

●制作コンセプト

デジタルになってから「手」を感じる事が少なくなった気がします。データを渡したら、あとは出校されるのを待つ。入稿前にシミュレーションをし尽くしているので、なにが出てくるかわかっているし、逆に予想以上のものが出てくることもない。出校時の驚きも楽しみも減ってしまい、印刷に対する希望を見出せなくなっているような感じがしていました。

そこで今回のチャレンジでは、写真をデッサンで指定して入稿していたときのように、自分たちの手で描くことによって印刷の喜びを体験してみることにしました。ハイテックに対してハイタッチ、感覚的、感情的な部分を印刷で再現していきたいというところですが、結果的には現代の技術を駆使してできあがっていくのですが、その過程においてすごくプリミティブな作業を続けることによって肉体で喜びを感じてみたい。作品を観る人にもそれをどこかで感じてもらえたらいいかなと思っています。

●コンセプトの背景

実はコンセプトの背景として「印刷はこれからどうなっていくんだろうか」という思いがあります。現在、オフセットはいわば印刷のスタンダードです。しかし、そのうち4色分解をしなくなるかもしれないし、オフセット印刷そのものが消滅するかもしれない。僕にはそんな危機感もあります。しかし、写真がデジタルになって印画紙はなくなっても「写真」という表現そのものは残ると同じように、「印刷」という言葉もやはり残っていくかもしれないし、マスプロダクトとしての印刷はたぶん残っていくでしょう。活字がなくなって

しばらくしたら、「やっぱり活字はほしいよね」と思ったように、オフセット印刷にも危機が訪れたら「やっぱりオフセットっていいよね」ということになるのかも知れません。とはいえその時、印刷が様式として残るのが、それとも概念として残っていくのか、残り方が問題です。

●デザイナーとプリンティングディレクター

日本がグラフィックデザイン王国といわれるほどに発達したのは、先達のデザイナーとプリンティングディレクターのかかり合いが大きな役割を果たしていたと僕は思っています。印刷を良くしていきたい、その思いがコラボレーションとなり、付加価値となって作品が誕生していた。ところがこの関係がデジタルの出現によって薄れることで、印刷からエモーショナルな部分や、人の介在による曖昧な部分がなくなってしまった。ひどい失敗もないかわり、想像を超えるような良い結果も生まれず、その結果、印刷に希望が感じられなくなってしまったように思うのです。

人の手がタッチできる部分を残すこと、これは今後の印刷がどう残っていくかを左右する重要なことのような気がします。印刷という作業に対して、人の気持ちで介入できるような余白の部分をどう残せるかは、たとえばデザイナーとプリンティングディレクターのかかり合いのような部分にあるのではないかと思います。

というわけで、プリンティングディレクターにも版を描きおこす一人として参加してもらいました。かつてのようなデザイナーと印刷のガチンコな関係をちょっと思い浮かべつつ、つくりあげた作品です。

——廣村正彰

TRIAL PROCESS

トライアルプロセス

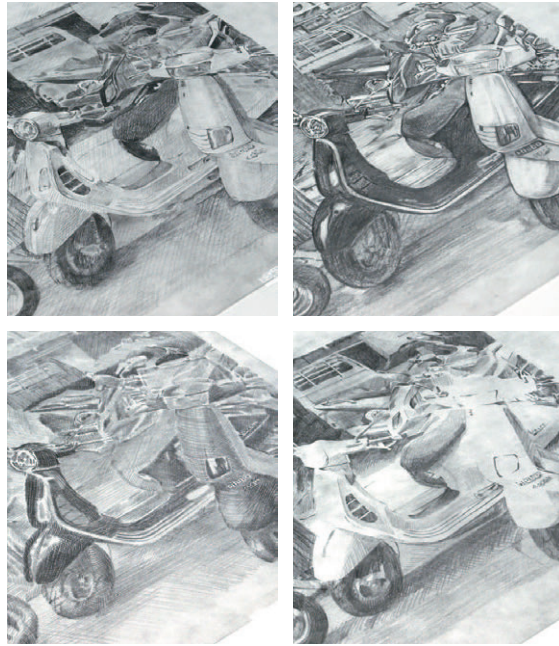
廣村正彰 × 尾河由樹 (PD)

4つの個性を 1枚に凝縮する

カラー分解した版が写真製版の分版ではなく、それぞれ異なるタッチで描かれていたら、仕上がりはどう変わってくるのだろうか。そこで、CMYKの4版を4人の人間が描き起こした。1枚の写真を4色に分解して、各自が鉛筆やサインペン、マーカーでトレースして合体させるといふ試み。さて、4つの個性がどのように印刷に反映されたのだろうか。

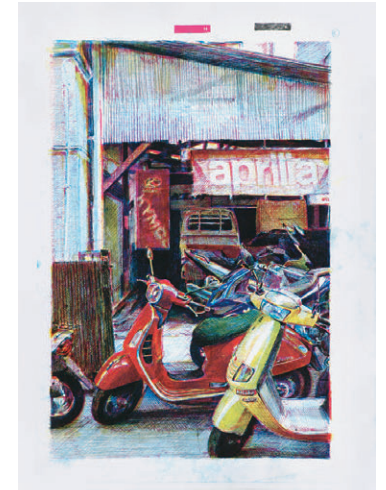
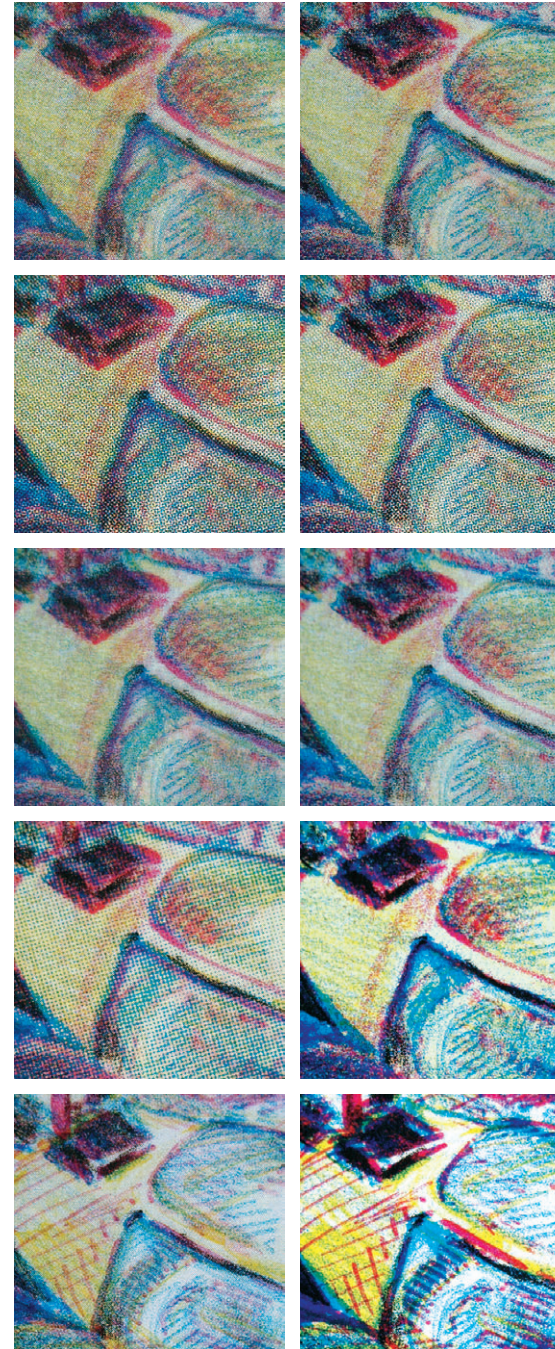


原稿のもととなったオリジナル画像。
これをCMYKの4色に分解したものをトレースした



原稿

C版 (シアン) 鉛筆画	M版 (マゼンタ) 鉛筆画
Y版 (イエロー) 鉛筆画	K版 (ブラック) 鉛筆画
M版 サインペン画	Y版 マーカー画



線画分解 / 175線 / 原稿入れ替え

分解・スクリーン線数・ タッチの違いを比較

ノーマル分解と硬調分解、さらに階調をとばした線画分解をさまざまなスクリーン線数で製版。また鉛筆画に加え、M版をサインペン画に、Y版をマーカー画に入れ替え、タッチの違いによる効果を比較、検討した。

ノーマル分解 175線 鉛筆画	硬調分解 175線 鉛筆画
ノーマル分解 100線 鉛筆画	硬調分解 100線 鉛筆画
ノーマル分解 フェアドット *1 鉛筆画	硬調分解 フェアドット *1 鉛筆画
ノーマル分解 線数は組合せ *2 鉛筆画	線画分解 175線 鉛筆画
ノーマル分解 175線 原稿入れ替え	線画分解 175線 原稿入れ替え

* 1 FMとAMの特長を生かしたハイブリッド方式によるスクリーン技術

* 2 C版: 65線 / M版: FM / Y版・K版: 175線

TRIAL PROCESS

トライアルプロセス

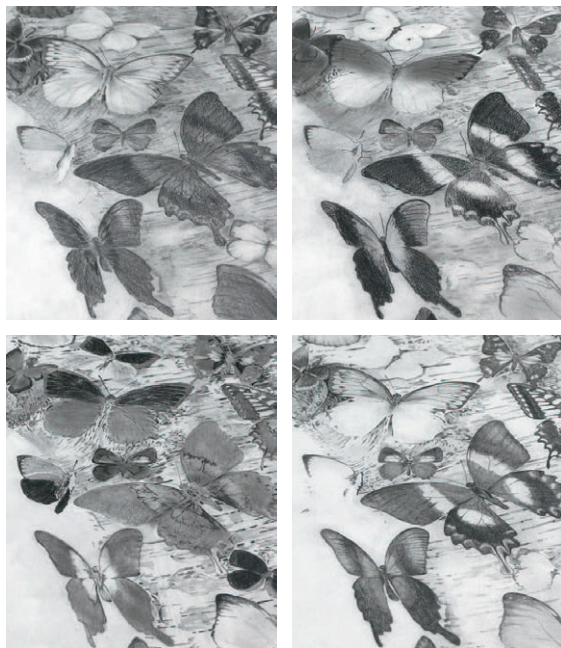
廣村正彰 × 尾河由樹 (PD)

手描きの原稿を 製版作業で仕上げる



5作品のうちの「蝶」のオリジナル画像

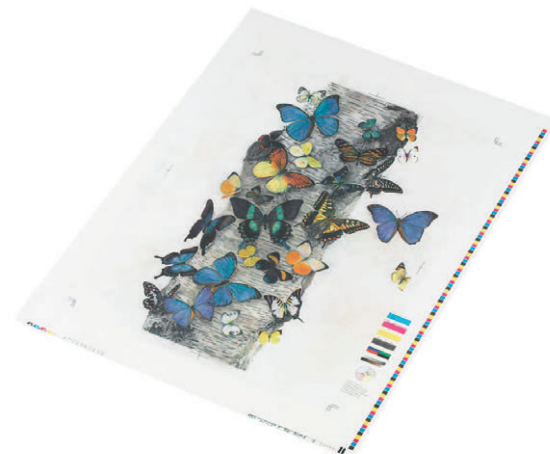
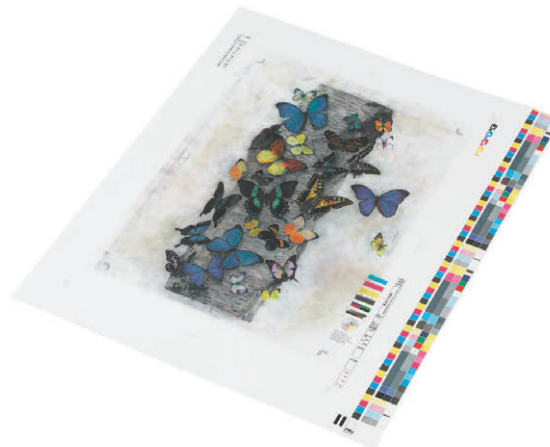
今回のポスター制作用に撮り下ろした写真原稿を4色分解し、これをもとに4人でCMYKそれぞれの版を描き起こした。画材は鉛筆に決定し、そのタッチをできるだけ忠実に再現するためにフェアドットを採用。そして手描きというプリミティブな作業とデジタル製版を融合させて完成させていった。



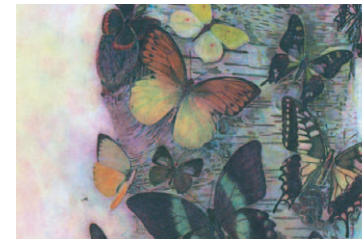
原稿

C版 (シアン) 鉛筆画	M版 (マゼンタ) 鉛筆画
Y版 (イエロー) 鉛筆画	K版 (ブラック) 鉛筆画

オリジナルを分版した各版のフィルムをライトテーブルで透過しながらトレースしていった。用紙は透過性があり、かつ鉛筆でも比較的濃度が出やすい「ルーセンスS」を使用

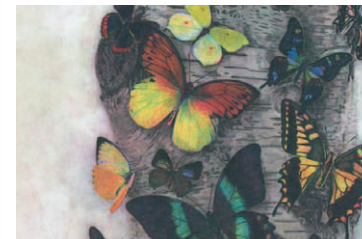


1. そのまま刷ってみる



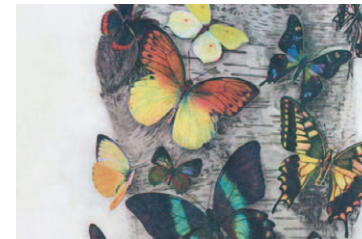
描き起こした原稿を、そのまま製版し印刷。色のバランスは比較的きれいに再現されたが、この作品のポイントである蝶に鮮やかさが不足し、留まっている白樺と背景に溶け込んでしまった

2. 蝶を引き立たせる



製版で蝶の鮮やかさを引き出すとともに、白樺と背景の薄い色味も抑えめに調整。また、蝶をより引き立たせるために蝶の影の版を作成。作品全体に奥行き感を出すことに成功した

3. 背景を整える



今回のトライアルでは、描き起こしの際についた背景や余白部分の手のこすれ跡をあえて残していたが、背景の色味を抑えめにした分、汚れのように見えてしまった部分を製版で整えた

AFTER TRIAL

トライアルを終えて

●トライアルを終えて

当初は、精度の高い印刷技術にプリミティブな作業でどこまで近づけるか、その偶発性と再現性を実験してみるつもりでした。それが過程の中で少しずつ変わっていきました。もっと感覚的になったというか、作業のライブ感を伝えたいと思うようになり、最終的には手描きのデッサンとデジタル製版の技術とのコラボレーションによって作品に仕上げたいこう、と考えるようになったんです。これは仕事の時の進め方とは逆の方法なんです。もともと僕のデザインは機能主義的なところがあり、デザインの基本的な要素としてテクスチャーやタッチなど感覚的な部分からは入っていきません。もちろんそのような要素の重要性は十分理解していますが、それは基本の骨格ではありません。

ところが今回はすべてがテクスチャーから始まりました。ある意味、表現者として自分が今までやってこなかったり捨ててきた枠外の部分をメインにもってきた、という感じです。正直言って、大きくシフト転換してもっと明解にデザイン的なことをしようかと悩んだ時期もありました。でも最終的にこの方向を貫いてよかったんじゃないのかな、と今は確信しています。

とにかく体力は使いました。ポスターの原稿を1枚つくるのに4人が1日ばかりで描きあげています。その苦勞の過程は、ポスターの端っこに現れていますので、そんなところから僕らの苦惱を感じていただけたら面白いかもしれません。

最後の1枚を描きあげて「やった～！終わった～！」となるまでの、凸版印刷の製版室にこもってデッサンに費やした5日間の体験は、いつもとは別な世界に身を置いた、ちょっといい時間となりました。

——廣村正彰

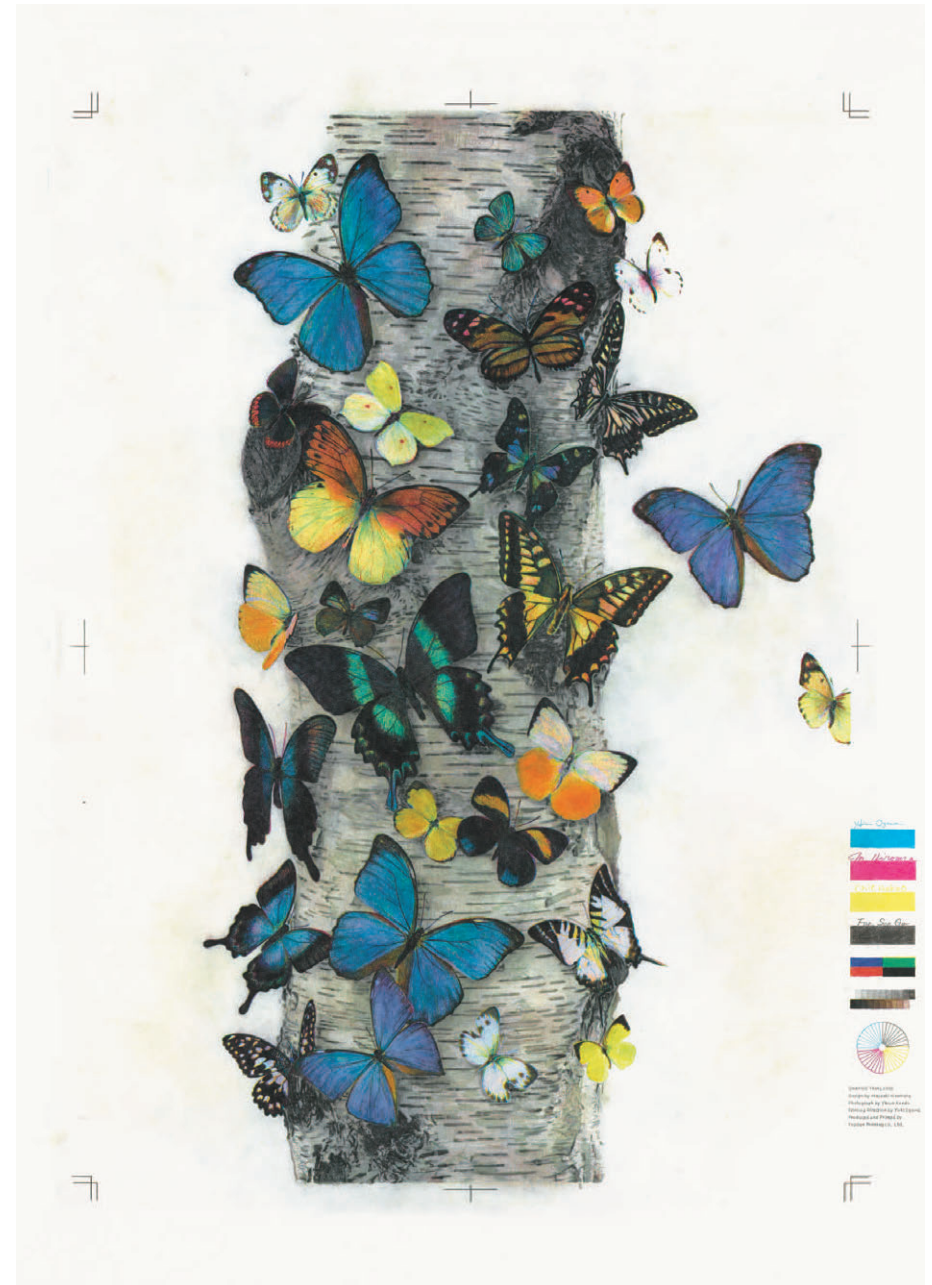


●プリンティングディレクターから

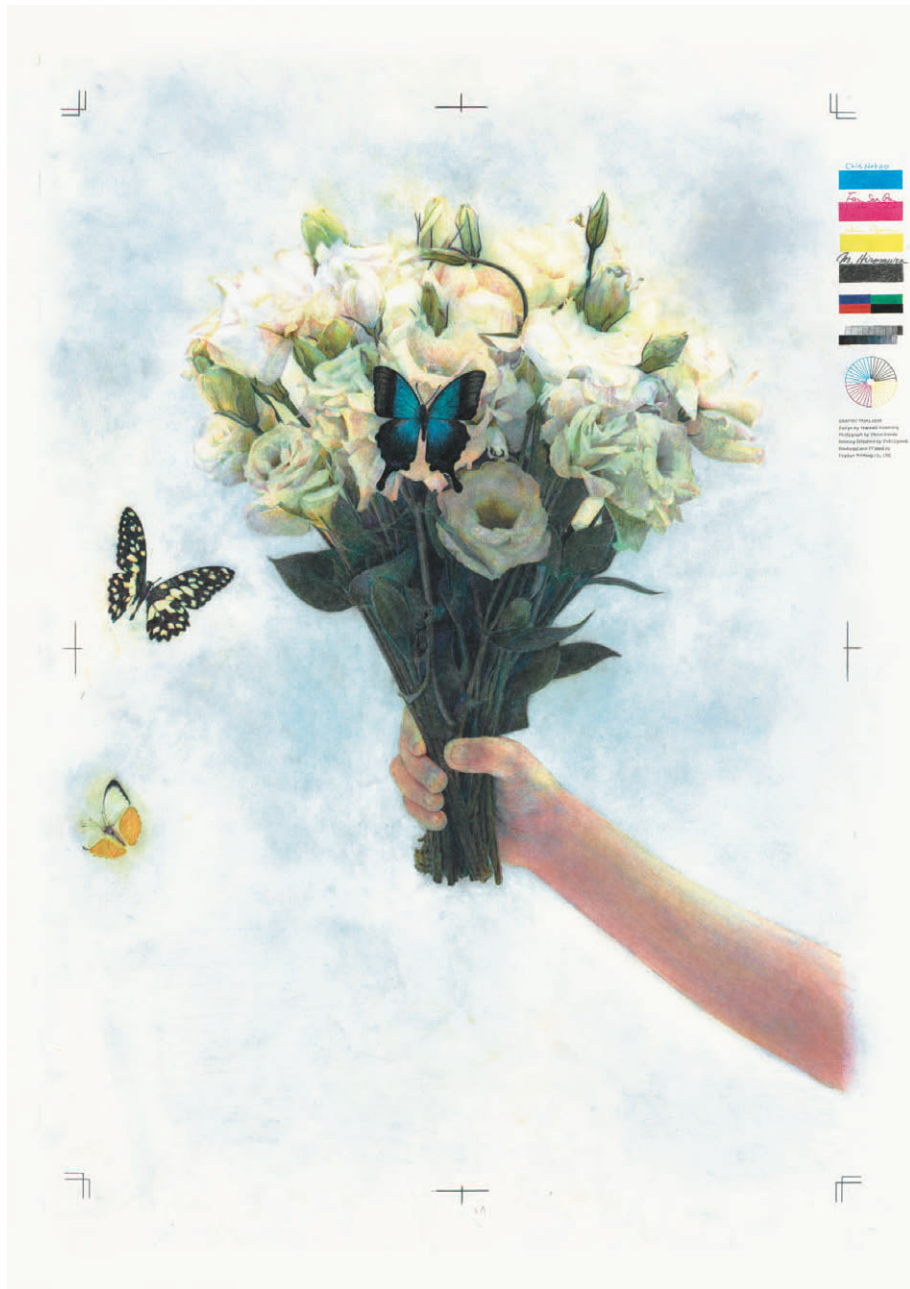
描く作業のポイントとなったのはバランスでした。タッチの強弱など人それぞれに癖があって、そのズレが合版したときにバランスの崩れを引き起こします。特に今回は仕上げの部分で最先端のデジタル技術を駆使しましたが、手描きの個性を殺さないためにも調整は最小限に抑えることを心がけました。それにしても、まさか自分も描くことになるとは。でも、おかげでデザイナーとプリンティングディレクターのコラボレーションがより明確にできたように思います。

もともとプリンティングディレクターの役割は、4色という非常に狭い再現性の幅のなかで、求められる表現を実現するために印刷の技術を発揮させるところにあります。ところが近ごろは出力見本の再現ばかりに注力して、印刷ならではの表現の良さまで追求しきれない場面が増えてきました。そんな葛藤を抱えているなかでの今回の取り組みは、「心にグッとくるような作品を生み出すには、人と人の生の取っ組み合いは欠かせない」と痛感するトライアルでもあったように思います。楽しい経験をありがとうございました。

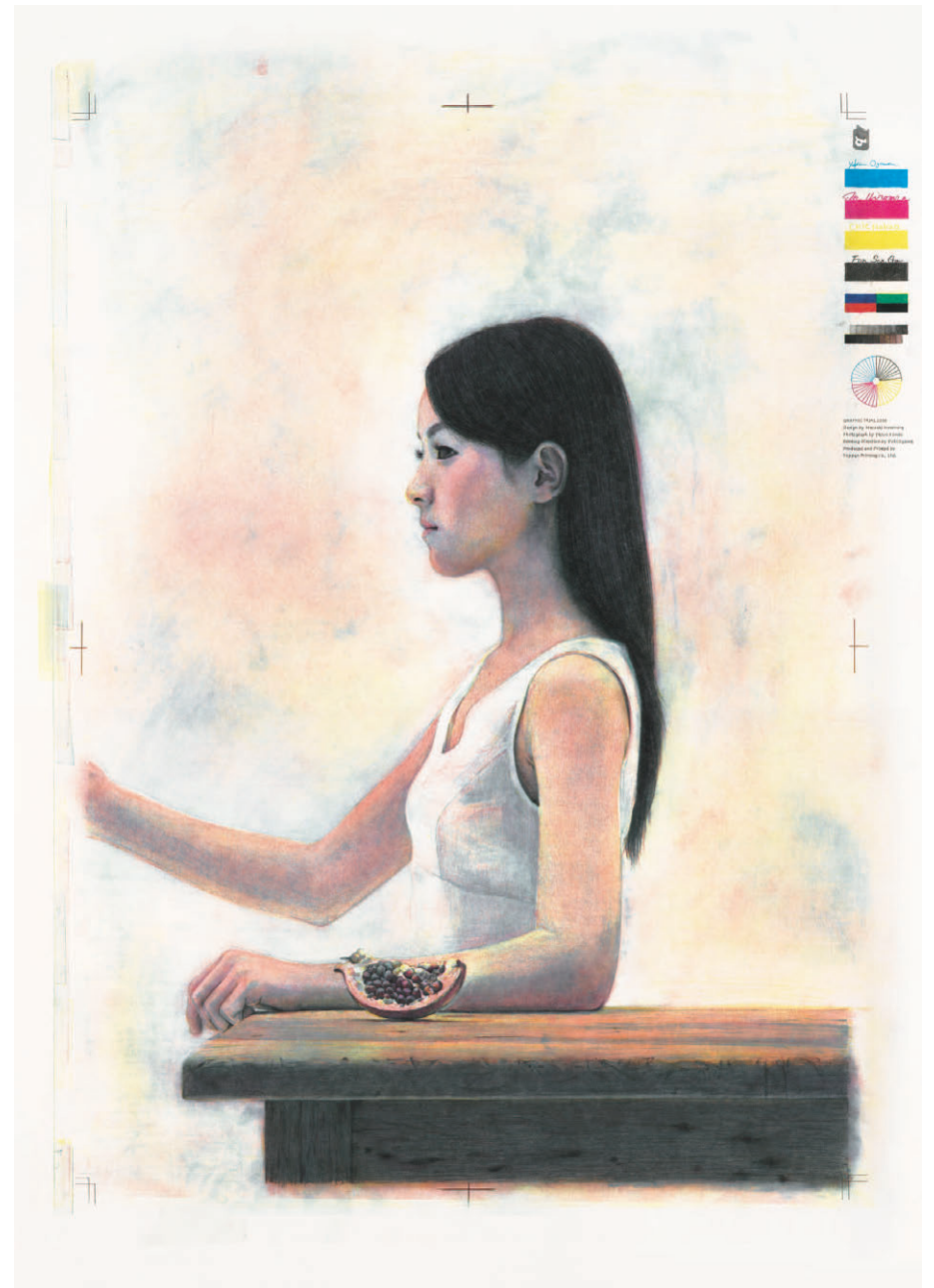
——尾河由樹



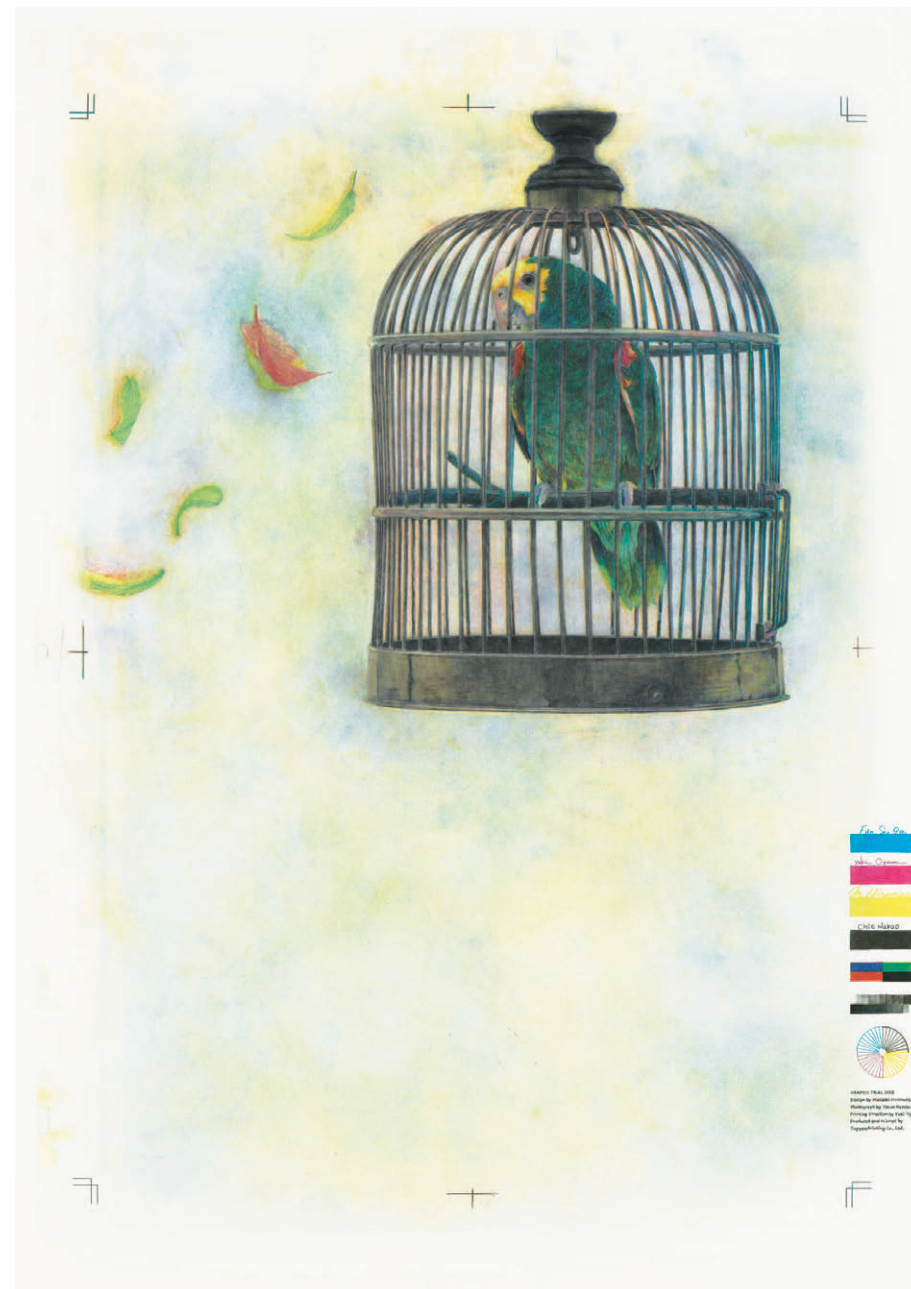
用紙：新鳥の子 / 白 四六判 135kg
版の構成：プロセス4色



用紙：新鳥の子 / 白 四六判 135kg
版の構成：プロセス4色



用紙：新鳥の子 / 白 四六判 135kg
版の構成：プロセス4色



FINISH

全作品とディテール

